

## 本のともしびを掲げる

木村友祐 小説家

八戸ブックセンターがオープン五周年。あれ、まだ五年しかたってなかったの? と意外な気がしたけれど、これからも、いつまでも、地域の人たちの心の拠り所として親しまれることを願います。ブックセンターに通った子どもが、いつか大人になって運営を引き継いでくれるといいな。

行政が運営に携わる日本初の“書店”として、歓迎の声の一方で好奇の目にもさらされた五年だったかもしれない。けれど、需要が少ないために町の書店では扱えない分野の本をカバーするという試みは、「本の世界ってこんなに広くて深いのか!」と、新たな本好きを増やすことに貢献してきただろう。それは授業料無償化にも似て、人を育てることにつながっている。

また、八戸ブックセンターは、表現の最前線で活躍する作家を招く窓口としても機能してきた。海流の表層と深層がかき回されるように、八戸および近隣の人々と作家が交流し、創造にかかわる何ものかを交換する。そこから生まれてくるものはきっとある。

ぼくは2016年のオープニングイベント「土地と声」に参加させてもらった。管啓次郎さん、温又柔さん、石田千さんという敬愛する書き手と八戸でご一緒できて、最高、感無量だった。イベント前夜だったか、みろく横丁の居酒屋で、テーブルに並んだ海の幸を前にして千さんが「さあ食べるゾ!」というふうには髪をくるとまとめた姿が忘れられない。

その翌年も、開設一周年記念企画「紙から本ができるまで展」にお声がけいただき、作品集『幸福な水夫』をグラフィックデザイナーの佐藤亜沙美さんの手によって見たこともないような装丁でつくってもらった。三菱製紙八戸工場で紙がどのように作られるかにはじまり、本のどの部位にどのような紙を選ぶか、どのような字体を選ぶか、その字体の配置はどうするか、佐藤さんは自らの造本の工程を惜しげもなく開示した。それは、モノとしての本と身体とのかかわりを再考させる画期的な展示だった。

本は、深海のような暗闇をそろそろと進むぼくらの、足元を照らす光のようなもの。苦しい時代だからこそ、このともしびを絶やしてはいけない。八戸ブックセンターは、本のともしびを大切に掲げる書店であり、拠点である。

**木村友祐** yusuke kimura

小説家

オープニング記念イベント「土地と声」(2016)  
「紙から本ができるまで展 木村友祐×佐藤亜沙美  
×三菱製紙八戸工場」(2017～2018)

1970年八戸市出身。2009年に『海猫ツリーハウス』(集英社)ですばる文学賞を受賞しデビュー。2020年『幼な子の聖戦』(集英社)が芥川賞候補となる。著書に『幸福な水夫』(未来社)、温又柔との共著『私とあなたのあいだ』(明石書店)など。

